

Expressions of Confirmation of Love : Mirrored Reflections of Heian Aristocratic Couples

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 倉田, 実 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/5714

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



男と女が見入る鏡の影

―平安貴族の調度に託す情愛表現―

倉 田 実

はじめに

鏡（銅鏡）は、呪具・祭具・神器であると共に、平安貴族にとって、室礼用の調度品や餞別などの贈答品であった。また、男女が共に日常的に使用する生活用品として、身近に置かれた存在であった。男性が起床してから鏡を見て、健康状態を把握することは、藤原師輔の「九条殿遺戒」に記されている。化粧や理髪は、男性貴族も行っており、その際に顔を映す鏡は必需品であった。鏡は、男女共に毎日使用されていたのであり、それは今日と変わることはない光景となろう。

しかし、注意したいのは、ガラス製ではなく、金属製（多く銅鏡）であったことで、鏡に対する多様な信仰があったことである。酸化して曇りやすい金属製なのに、光を反射し、物が映ること自体が神秘的であったことであろう。その明るさは魔を除けるものとして呪具・祭具などになっていた。また、物が映ることによって物影を宿すという通念が生じていた。鏡に人の姿を思い浮かべた時、それは鏡に人の面影が宿っているからだと言はれていたのである。

ここで検討してみたいのは、鏡が人の面影を宿すということで、男女の情愛のありようと密接に関わっていたということである。男女二

男と女が見入る鏡の影

人の影が並んで鏡に映っていると情愛を確認したり、離れている相手の面影を鏡に見出して慰撫したりして、男女の良好な関係が維持されていた。また、面影を宿さないとすることで、愛情の破綻や別れが暗示されていた。鏡は、人の面影を宿す物とされることで、情愛のありようと関係していたのである。こうした鏡に託された情愛表現を、平安文学作品から探り出し、その実際を検討してみたい。

なお、散文作品の本文引用は新編日本古典文学全集、『今昔物語集』は新日本古典文学大系、和歌は新編国歌大観、『御堂関白記』は大日本古記録、『類聚雑要抄』は川本重雄・小泉和子『類聚雑要抄指図巻』（中央公論美術出版、一九九八年四月）によった。表記は、私に換えた場合もある。

一 鏡の置き場所

平安貴族に日常的に使用された鏡は、その置き場所によって、少なくとも三種あったと思われる。この点については、あまり注意されていないようなので、このことを確認しておきたい。

『類聚雑要抄』によれば、邸宅内で、鏡には次の三種の置き場所が認められる。一つは、南廂の昼の御座の横、二つ目は、寝所となる御

帳の中、三つ目は、小さい鏡箱が納められる、より大きな各種の箱である。『類聚雜要抄』は、十二世紀中ごろの成立と見なされているが、この三種については、平安時代中期には認められることと思われる。寝殿南廂中央の「階隠の間（中の間）」は、昼の御座として室礼され、座の横に鏡箱と鏡台が、二階棚と唐櫛笥などと並べて配置された。この鏡箱は、径一尺一寸（三三・三センチ）で、鷺足つきの台に置かれた。この大きさの鏡箱に入るので、大型鏡となる。化粧用であり、鏡箱から取り出して鏡台に懸けて使用されるが、懸けずに侍女に持たせることもあった。

母屋にしつらわれる寝所となる御帳には、後方の二本の柱に一双の鏡が懸けられた。径一尺二寸の大きさとされているので、先の鏡箱には入らない。別の大型鏡が用意されたのであろう。御帳に休む男女の魔除け、守りとするもので、使用しない昼間は、箱に入れられたかどうかよく分からない。

各種の箱に納められる小さな鏡箱には、小型鏡が入れられる。各種の箱とは、櫛箱・唐櫛笥（唐匣）・搔上箱・手箱などになる。これらの箱の置き場所は相違するが、便宜の為、ここでは小型鏡として一括する。手箱以外の箱に納める鏡箱の径は三寸八分（一一・八センチ）、手箱のは径三寸五分（一〇・八センチ）になっている。これらの小型鏡は言わば手鏡用となる。

平安貴族の鏡は、小型用を一括すると、少なくとも三種の大きさの物が使用されていた。寝所で鏡が示されれば、それは魔除け用の大型鏡、鏡台が同時に示されれば化粧用の大型鏡、櫛箱や手箱などから取り出すと手鏡用の小型鏡となる。しかし、平安文学作品には、そのいずれかであることが不明な場合が多い。鏡に箱が伴うのは、先に触れたように、銅鏡は酸化して曇りを生じやすいからである。そのために、使用しない時は、入帷子に包んで鏡箱にしまう必要があった。したがって、鏡と鏡箱とは、それでセット（一具）であった。また、廂の間の場合、鷺足の台に置かれた鏡箱と鏡台とがセットになり、室礼の調

度となっていた。

鏡の形は、鏡箱から判断されるが、『類聚雜要抄』では、搔上箱に納めるのが円形である他は、いずれも八花形（八稜形）になっている。八花鏡は、唐鏡の影響を受けたもので、平安時代後期になって円形の和鏡様式が完成するとされている。『類聚雜要抄』で八花形が多く見られるのは、古式が意識されているのかもしれない。

いずれの形や大きさでも、鏡の裏面の中央には紐を通すつまみがあり、取っ手の役割もしていた。柄鏡は、室町時代以降のものである。

つまみの回りには文様が施こされている。八花鏡では、空想的な瑞花双鳥式の文様であったが、和鏡になると日本の山野に見られる花や鳥になった。裏面の様子が示されれば、そこから和鏡かどうか判断できることになる。この点は、後にも触れることになる。

鏡については以上のことだけ確認し、節を換えて、男女関係とかかわるありようを具体的に見ていくことにしたい。

二 寝所に置かれる鏡

寝所、すなわち御帳などに置かれる鏡は、新宅移徙に際して、家母（妻）が持参して移徙の行列に加わり、新宅の御帳に置いて夫婦同衾することが、十一世紀以降の史料で見られ、このことが「主婦権」の現れとして注意されている²。また、婚姻儀礼において枕上に鏡を置いたことも、この関連で理解されている³。しかし、鏡は、本来的には御帳（寝所）の調度としてすであつた。御帳に懸ける鏡のことは、『九曆』天曆四年（九五〇）七月二三日条に、憲平親王立太子の折の室礼で、御帳台の調度として「御鏡二面（加繡緒并笥台等）」と見える。また、次のような事例もある。

此日姫宮着袴、牛時許参大内、申時立御帳、是吉時也、取去本御帳立之、薄物蘇芳末濃帷、懸鏡等皆小作、（以下略）

〔御堂閔白記〕長和四年（一〇一五）四月七日条

三歳になった禊子内親王（父三条天皇、母道長次女妍子）袴着の記事である。既存の御帳を撤去して、小さめの物を誂え、さらに御帳に懸ける鏡をはじめとして諸調度も小作りにされていた。袴着の室礼であったとしても、御帳に鏡を懸けることが、すでに当然であったことが窺えよう。言葉を換えれば、寝所にはお守りとして鏡が必要な調度であったことになる。

このことからすると、『落窪物語』の落窪君と道頼の結婚に際して、鏡のことが語られる理由もはっきりする。

さて、あこき、ただ一人して、言ひ合すべき人もなれば、心一つを千々になして、立ち居つつ、おまし所の塵払ひ、そそくりて、屏風、几帳なれば、しつらひなさむ方もなければ、いとわりなけれども、（略）この君（落窪君）は、いささか御調度持たまへける。母君の御物なりけり。鏡などなむ、まめやかに美しげなりける。「これをだにも、持たまへらざらましかば」と言ひて、かきのごひて枕上に置く。

『落窪物語』巻一・四九頁）
結婚二日目の用意を、あこきが算段するところである。婚姻用寝所の調度は何もなかったが、落窪君の母の形見となる鏡だけはあったので、あこきは表面をぬぐって枕もとに置いてある。この鏡に対して、新全集は「他に飾るものがないので、枕もとに置いた」としているが、寝所の室礼のために必要なものなので、わざわざ置いたことになる。守りとなる鏡があったことに、あこきは安心したのである。そして、鏡が、二人の結婚の守りとなることを念じたことになる。

『落窪物語』は、この後も寝所の守り、男女二人の守りとなる鏡のことを語っていく。三日目の朝にも、道頼から後朝の文が届くが、ここで初めて落窪君は返歌している。この贈答歌には、先の鏡が詠み込まれていた。

常の御許（道頼）より、ただ今、

よそにてはなほ我が恋をます鏡添へる影とはいかでならましとあれば、今日なむ御返り、

男と女が見入る鏡の影

身をさらぬ影と見えてはます鏡はかなくうつることぞ悲しき
いとをかしげに書きたれば、いとをかしげに見たまへるけしきも、
志あり顔なり。 （『落窪物語』巻一・五五〜六頁）

道頼は、「あなたと離れていては、やはり私の恋心は募っていくので、真澄鏡の、あなたと連れ添って映る影に、なんとしてもなりたいたいものです」と詠んでいる。「ます鏡」は、鏡の歌語で、きれいに映る意を働かせ、「ますみの鏡」ともされ、用例の多くは「恋をます」と掛詞になっている。ここの「ます鏡添へる影」は、文字通り、二人が並んで鏡に映ることを言う。「添ふ」は添加の意であり、落窪君の影に、自分の影を添わせたいというのである。新全集は「あなたの鏡に映る影のように、何とかしてあなたと常に一緒になったらどんなものでしょう」と口語訳しているが、鏡は比喻ではなく、寝所にあつた鏡を受けて、連れ添って並んで映る影として実体的に詠まれている。道頼は、寝所の鏡に託して、一緒に住みたい、連れ添いたいと詠んだのである。

道頼の意を汲んだ落窪君は、贈歌の意を切り返す女歌の発想で返歌している。「私の身から離れない影と見えても、鏡には、はかなく映って、他に心が移ってしまうことが悲しいことです」と、男の心変わり措定して詠んでいる。「うつる」を、影が映る意と、心が移る意の掛詞にしたのである。しかし、「身をさらぬ影」をいうことで、道頼の「添へる影」に同調しているのは確かである。落窪君は切り返しつつも、道頼に寄り添おうとしているのである。

道頼は、初度の懸想文を贈る「言ひ初め⁴」をして以来、たびたび消息を贈って来ていたので、右では「常の御許」とされている。そして、初めて受け取った落窪君の返歌を「いとをかしげに見」ている。返歌の意に満足したのであり、だから「志あり顔」になっている。

この贈答歌は、「添える影」「身をさらぬ影」というように、鏡に男女の影が並んで映ることを詠むことで、愛情の確認や持続を庶幾している。鏡には、人の影が宿るという考えが前提にあったからに他なら

ない。それを推し進めて、二人の影が並んで映ると発想したことが趣向となったのである。

この鏡が入っていた鏡箱は、継母によって、古びたものと取り替えられてしまうが、鏡は手もとに残ることになる。鏡が継母に取られたとしたら、それは不吉な前兆になるが、箱のほうを取られたとすることで、それを回避したことになる。「鏡は独自の所有物である、との通念が強かったのではなからうか」とされる事情があったのであろう。この後、取り替えられた古びた箱によって、道頼の妻が、落窪君であることを継母たちは知ることになる。その際に落窪君は、次の歌を詠んで継母方に託していた。

明け暮れは憂きこと見えし増鏡さすがに影ぞ恋しかりける

〔落窪物語〕巻三・二二二頁

落窪君は「昔日の明け暮れは、つらいことが見えた真澄鏡でしたが、今はさすがに映る昔の面影が恋しいことです」と詠んでいる。二人の影ということではないが、鏡に影が宿ることを詠んでいるのは確かである。なお、落窪君の鏡に対して、「家妻としての権利をシンボリックに表象するもの」とする説があるが、紹介だけにとどめたい。

鏡は、そこに二人の影が宿るとすることで、情愛表現の一つに成り得ていた。『落窪物語』の場合は、たまたま寝所用に供された鏡になるが、他の鏡であっても、同じ事情を認めることができる。このことは、後に再度扱うことにして、次は、化粧用の鏡と思われる例に移りたい。

三 化粧用の鏡

鏡を見ての朝の化粧（顔作り）は、日の光の差す廂の間でされた。南廂中央の昼の御座には、鏡箱と鏡台がセットになって置かれていた。この鏡も男女の情愛表現と関わっている。その例を『源氏物語』から取り上げたい。光源氏の須磨下向を前にして、紫上と過ぐす段である。

御鬢かきたまふとて、鏡台に寄りたまへるに、面瘦せたまへる影の、我ながらいとあてにきよらなれば、「こよなうこそおとろへにけれ。この影のやうにや瘦せてはべる。あはれなるわざかな」とのたまへば、女君、涙を一目浮けて見おこせたまへる、いと忍びがたし。

身はかくてさすらへぬとも君があたり去らぬ鏡の影は離れじと聞こえたまへば、

別れても影だにとまるものならば鏡を見てもなくさめてまし柱隠れに隠れて、涙を紛らはしたまへるさま、なほこら見る中にたぐひなかりけりと、思し知らるる人の御ありさまなり。

〔源氏物語〕須磨卷・一七三頁

光源氏は、鬢の毛を整えるために紫上の鏡台に寄って、自分の影を見つめている。鏡台が示されているので廂の間でのことになる。そして、紫上には、「すっかり衰えてしまったよ。この鏡の影のようにつれてるのであるうか。悲しいことですね」と言っている。鏡の影によって我が身の衰えを知るといふ発想であり、宇治の大君などにも認められるが（『源氏物語』総角卷・二八〇頁）、和歌にも類例が多くある。

物思ひに衰へにける顔を、鏡の影に見はべりて

なまじひにとまれる顔を今朝見れば鏡やつらき涙とまらず

〔為頼集〕・四四

鏡を見て恋にやつれた顔を見出すとする歌である。この他、鏡に白髪を見出すとする歌にもこの発想がある。

年ごとに白髪の数を増鏡見るにぞ雪の友は知りける

〔後撰集〕冬・四七四・兼輔

増鏡底なる影にむかひるて見る時にこそ知らぬ翁に会ふ心地すれ

〔拾遺集〕雑下・五六五

光源氏は、鏡を見ることによって「面瘦せたまへる影」に気付き、そのことを紫上に訴えている。光源氏のこの発言に対して、新全集は、

「直前の感想とくいちがっている。紫の上に対する甘えた演技でもあろう」としているが、くい違っているはいまい。「面瘦せたまへる影」は鏡によって見出されたものであり、それを「きよら」とするのは、当時の美意識であろう。光源氏は鏡によって、「面瘦せたまへる影」を見出したが、紫上には直接分かることである。光源氏の言葉によって、紫上は涙をいっぱい溜めこんでいる。そこで、光源氏は、鏡に対する発想を変えて、影を宿す意を表に出して紫上を歌で慰撫している。

光源氏の贈歌を、新全集は「わたし自身はこうして遠くへ流浪していこうとも、心はあなたのそばを離れない鏡みたいに、あなたからかけ離れはしないでしょう」としている。しかし、これも「鏡」は比喩的な措辞ではない。結局は、「かけ（は）離れじ」と「影は離れじ」との掛詞になっており、「あなたのそばを去ることはない鏡に映った私の影は離れることはないでしょう」という意になる。鏡は実体的であり、そこに影が宿ると言う発想で詠まれている。穿って言えば、あなたが鏡を見れば、私の影はそこに並んで見えますよ、ということになる。光源氏はこう詠むことで、涙に溢れた紫上を懸命に慰撫しているのである。

これに対して紫上は、控え目に光源氏の慰撫が成り立たないことを詠じている。「お別れしても、あなたの影だけでも宿るならば、鏡を見ても慰めることができるでしょうが」として、鏡に光源氏の影がほんとうに宿るものでしょうかと覚めた思いを表出している。これは、鏡に影が宿ることなどあり得ないとか、所詮幻像でしかないということではなく、宿ったとしても、そのうち影は移ってしまうでしょうということになる。光源氏の心変りを案じて、不安をひそやかに詠じたこととなる。落窪君が「身をさらぬ影と見えてはます鏡はかなくうつることぞ悲しき」と詠んだのと同じく、男の心が他の女性に移って鏡に影が宿らなくなることを危惧しているのである。

この場面は、化粧用の鏡を軸として、二人の情愛のありようが語られている。ここで互いに鏡の贈与があったとする説があるが、そのこ

との明示はなく、語られているのは紫上の鏡だけである。とにかく、別離に際しての記憶ともなる印象的な光景であり、別れたあとに、両者ともこの時のことを回想している。紫上の場合、次のようにある。旅の御宿直物など調じて奉りたまふ。縑の御直衣、指貫、さま変りたる心地するもいみじきに、「去らぬ鏡」とのたまひし面影の、げに身に添ひたまへるもかひなし。出で入りたまひし方、寄りたまひし真木柱などを見たまふにも、胸のみ塞がりて、ものをとかう思ひめぐらし、世にしほじみぬる齢の人だにあり、まして馴れ睦びきこえ、父母にもなりて生ほし立てならはしたまへれば、恋しう思ひきこえたまへる、ことわりなり。

『源氏物語』須磨巻・一九〇頁

須磨の光源氏から文が届き、紫上が「宿直物」などを贈ろうとする段である。紫上は、別離の時のことを思い浮かべている。さらに光源氏が住まいしていた時のことにも思いが及んでいる。紫上は「去らぬ鏡」とのたまひし面影」が、光源氏の歌にあったように自身に寄り添っているように感じている。「げに身に添ひたまへるも」の「げに」は、光源氏の歌を受けていることは間違いない。そうすると、「身に添ひたまへる」とあるのは、実際に鏡を見て、そこに光源氏の姿を見出していることになる。諸注の理解は曖昧だが、単に面影が彷彿としたのではなからう。二人並んだ影を鏡に認めたのである。「げに」のニュアンスを汲み取れば、こうしたことを語っていると思われる。しかしそれは「かひなし」なのである。光源氏が側にいないからである。それでも紫上は、光源氏の影を鏡に認めて、さらに「出で入りたまひし方、寄りるたまひし真木柱」に面影を追い求めている。右の場面に明示されているわけではないが、ここにも鏡があったことになる。

一方の光源氏は、明石に移った報告を兼ねた文に、別離の時のことを記している。

二条院のあはれなりしほどの御返りは、書きもやりたまはず、うち置きうち置きおし拭ひつつ聞こえたまふ御気色、なほことなり。

「かへすがへすいみじき目の限りを見尽くしはてつるありさまなれば、今はと世を思ひ離るる心のみまさりはべれど、『鏡を見て』とのたまひし面影の離るる世なきを、かくおぼつかかなながらや、とこころ悲しきさまさまの愁はしさはさしおかれて、

はるかにも思ひやるかな知らざりし浦よりをちに浦づたひし
て

夢の中なる心地のみして、覚めはてぬほど、いかにひが言多からむ」と、げにそこはかとなく書き乱りたまへるしもぞ、いと見まほしき側目なるを、いとよなき御心ざしのほど、と人々見たてまつる。
〔源氏物語〕明石巻・二三五〜六頁

光源氏は暴風雨に襲われた危難を脱したとはいえ、「いみじき目の限りを見尽くしはてつるありさま」なので出家を思うものの、紫上の面影は、目先を離れることはないとしている。紫上の面影は、別離に際して「別れても影だにとまるものならば鏡を見てもなぐさめてまし」と詠んだ時のものである。「鏡を見ても」の部分を用いていることからすると、光源氏は、毎日鏡に自分の面影を見出している紫上の様子を思い浮べていることになろうか。二人は、鏡に託して詠み合った贈答歌を別離の思い出として、いつも心に抱いているのである。鏡には、そこに人の影が宿るからであり、『源氏物語』はさらにこの二人が並んで鏡に映ることを語ることになる。

四 男女が寄り添う鏡の影

『源氏物語』は、京に帰還した光源氏の栄華を描いていくが、その一環として六条院が造営される。その新年に、光源氏と紫上が二人並んだ鏡の影が贈答歌に詠まれている。これは池の水面を鏡に見立てた「池の鏡」の用例になる。

朝のほどは人々参りこみて、もの騒がしかりけるを、夕つ方、御方々の参座したまはむとて、心ことに引きつくるひ、化粧じたま

ふ御影こそ、げに見るかひあめれ。「今朝この人々の戯れかはしつる、いとうらやましう見えつるを、上には我見せたてまつらむ」とて、乱れたることどもすこしうちませつつ、祝ひきこえたまふ。
薄氷とけぬる池の鏡には世にたぐひなき影ぞ並べる
げにめでたき御あはひどもなり。

曇りなき池の鏡によろづ代をすむべき影ぞしるく見えける
何ごとにつけても、末遠き御契りを、あらまほしく聞こえかはしたまふ。
〔源氏物語〕初音巻・一四四〜五頁

光源氏は、夕方に六条院の御方々に参座しようとして、念入りに化粧をし、新年の祝いをまず紫上に行っている。その祝意を込めて場面は贈答歌を配している。光源氏の化粧は、鏡を見ていることは確かだが、鏡のことは歌の「池の鏡」になっている。

光源氏の贈歌は、「影ぞ並べる」とあるように、明確に池の鏡に両者の影が映って見えることを詠んでいる。鏡に男女の影が並んで映ること、それは円満な夫婦関係であることの証左となる。須磨の別離に際しては、紫上の鏡に光源氏の影を宿していたが、今は六条院春の町の南池が鏡となり、そこに両者の並んだ影が見出されている。紫上に對する新年の祝意に関わるものとして「池の鏡」に「影ぞ並べる」という光景が捉えられている。

贈歌を受けた紫上の返歌にも「池の鏡」が詠まれている。光源氏は、「世にたぐひなき影」として自分たちを讚美したが、紫上はそれを踏まえて、さらに「よろづ代をすむべき影」としている。「すむ」は「澄む」と「住む」の掛詞であり、「池の鏡」に、とこしえに続く幸いを見出して予祝している。

新造六条院の新春は、「池の鏡」に影を並べる夫婦の円満な関係を定位したことになる。男女が並んで寄り添う鏡の影をいうことで、情愛表現として象徴的な場面を象っている。

こうした光景は、かなり物語的な表現なのかもしれない。和歌の世界での光景は、次の例しか探せないが、それも「歌絵」という一つの

物語であった。

大殿の歌絵に、男の鏡を持ちて傍らにある女に見せける所を詠める

これを見よ真澄の鏡清ければよろづ代経べき影ぞ並べる

〔散木奇歌集（俊頼）〕雑部上・一三五五

歌絵の絵柄を詠んだ歌である。この歌絵は、男が鏡を持って、側にいる女に見せている絵柄であり、そこには二人が映っていたのである。歌は、そのことを詠んでいる。歌は、「これを見なさい。真澄の鏡は清く磨かれていたので、万年も続きそうな私たちの影が並んで映っているよ」となる。絵も歌も、鏡に二人の影が並んで映るとしたことで、情愛を確認しているのである。そして、これは先の「初音」巻の光景と重なっている。

結句「影ぞ並べる」は、光源氏歌のそれと同じである。また、四句の「よろづ代経べき」は、紫上の「よろづ代をすむべき」と酷似している。光源氏と紫上の贈答歌の措辞と相似していることは確かである。源俊頼は、歌絵の男女を夫婦として認めたくて、「初音」巻を意訳して、この歌を詠んだ可能性は高い。そして、男女が並んで寄り添う鏡の影は、円満な夫婦関係や男女の親密な情愛を象るものとして意識されていたことを提示している。

五 影を宿す鏡の歌

物語以外で鏡に男女の影が並んで映ることを詠んだ和歌は、以下の①③などが該当するかもしれないが、この他には見つけにくい。しかし、鏡に影が宿るとする発想の歌は多く認められ、それが男女の情愛表現とかかわっている。この場合、鏡を借りて返す際や、饞別の際の歌に多くあるので、ここでは、これらの例を取り出していきたい。鏡に宿る影を言うことが情愛表現になる用例であり、男女関係はこのことで維持される。逆に、影が宿らないとする用例もあり、この場合は

男と女が見入る鏡の影

男女関係の破綻を意味している。この例は次節で触れることにしたい。

まずは鏡返却の際の歌である。鏡を借りる場合、多くは男であり、大型では持ち運びに少々やかいかいである。貸し借りされる鏡は、小型のものであった可能性を指摘しておきたい。普段使いの廂に置く鏡を借すことは考えられない。各種の箱に入れられた鏡箱のものを貸したのである。男が借りる理由は、女の家から直接出仕し、その夜は宿直することになっていた場合などであろう。鏡を借りにわざわざ女の家を訪ねることもあったかもしれない。

① 鏡借りて返すとて、敷の下に書きつく、男

暁の別れはをしの鏡かも面影にのみ人の見ゆらん

〔信明集〕・九七

鏡の敷物の下に書きつけて、鏡を返す際の歌である。詞書に借りた先の明示はないが、詠者が「男」とあるので、女からなる。大切な鏡を借りることができるので、この女とは契りを交わしていよう。初句に「暁の別れ」とあるのを文字通り取れば、後朝の歌の可能性もある。また、二句「をしの鏡」の「をし」は、「惜し」に夫婦仲の例えとなる「鴛鴦」を懸けているので、男女関係はやはり認められる。「鴛鴦」が詠まれたのは、鏡の裏面にこの文様があったからだと思う。この文様からするとこの鏡は和鏡になり、小型のものになるか。

歌は、「暁の別れは惜しまれるので、お借りしたのは、「をし」の名を持つ鴛鴦の鏡なのです。だから、「面影になって、鴛鴦のように私と並んだあなたが、鏡に見えるのでしょうか」となる。平野由紀子『信明集注釈』（貴重本刊行会、二〇〇三・五）は、「あなたの面影が、私の眼前にありありと見えるのでしょうか」としているが、「眼前」ではなく、鏡の中に見えるのである。また、「鴛鴦」が詠まれているので、「私と並んだあなた」と解してみたが、このように解釈できるならば、この歌も前節の補遺になる。鏡の裏面が鴛鴦の文様になれば、その番いのように男女として映っていたという意を汲むべきだと思われる。

そうすることで、情愛を確認しているのである。

② はやう見し人の鏡を借りて、返しに
鏡山朝立つ霧は曇れども見初めし影はさやかなりけり

〔相如集〕・五五

以前に逢った女から鏡を借りて返す際の歌である。「鏡山」は近江国の歌枕で、ここは借りた鏡を言う。歌は、「鏡山を朝立った時は、霧が立って曇っていましたが、あなたを見初めた時の鏡の影は、澄みきっていたことでしたよ」となる。上句は序詞のようだが、「曇れども」に逢瀬が絶えていたことを暗示しているのかもしれない。そうすると、二人の仲は絶えています。逢瀬の時の面影は、鏡にはっきりと宿っていましたとの意になる。木船重昭『中務集相如集注釈』（大

③ 初めて逢へる女に鏡を借りて返しつかはすとて

見て後はいと心ぞます鏡影すむ人になりやしなまし

〔基俊集〕・六七

初めて逢った女から鏡を借りて返す際の歌である。歌は、「お逢いしたあとは、いよいよ恋心が増しましたので、お借りした真澄鏡の中に影として住む人になって、あなたといたいものです」となる。先に見た『落窪物語』の道頼歌「よそにてはなほ我が恋をます鏡添へる影」とはいかでならまし」と酷似した措辞である。滝沢貞夫『基俊集全釈』（風間書房、一九八八年二月）は、『伊勢物語』二七段の「我ばかりもの思ふ人はまたもあらじと思へば水の下にもありけり」によるとするが、この道頼歌のほうがふさわしい。女の鏡に住みたいと空想すること、影を並べるように一緒に居たいとする願望を詠んでいよう。この歌も前節の補遺となる。鏡は面影を宿すのであり、初めて逢った女と二人並んで鏡に映るような境遇を念じたのである。これも後朝の

歌であろう。

④ 思ひながら、色に出でざりける女のもとにて、鏡を借りて、
その裏に書きつけて返し侍りける

増鏡心も映るものならばさりとて今はあはれとや見ん

〔千載集〕恋二・七七六・藤原公衡

詞書冒頭の「思ひながら」の主体が分かりにくい、男と解しておきたい。こちらに思慕の情があっても、顔色に出してくれない女のところから鏡を借りて、その裏に書き付けて返した歌となる。女は、男の求愛を受け入れようとはしないのである。そこで、この歌を書き付けたことになる。歌は「真澄鏡に、姿だけでなく思いの増す心も映るものならば、いくら何でも、今は私のことを哀れだと思ってくれるでしようか」としている。借りた鏡に心も宿したので、思いのたけを知ってほしいと念じたのである。鏡に面影が宿するという通念に、さらに心も宿したとしたところが趣向となっている。

鏡は、人の面影が宿るとされたのであり、そうであることによって求愛や愛情の確認を託すにふさわしい調度なのであった。場合によっては、そのために借用することもあったのかもしれない。鏡返却の際の歌は、以上にとどめて、さらに餞別の鏡を詠んだ歌に転じたい。

* * *

餞別の鏡を詠んだ歌も、そこに自身の影を宿せるといふ信仰を前提にしている。

⑤ 下野にまかりける女に、鏡に添へてつかはしける

ふたご山みとも越えねど増鏡そこなる影をたぐへてぞやる

〔後撰集〕羈旅・一三〇七

下野国に下向する女に、鏡に添えて贈った歌である。贈り手は、男であろう。初句は「ふたみ山」だが、下野の歌枕と解すべきなので、諸注の指摘のように「二子山」と改訂した。歌は、「二子山と一緒に越えないけれど、鏡の底に宿る私の影を添わせて贈ることにします」となる。我が身ではなく、鏡に宿る私の影が、あなたに寄り添って

二子山を越えますということになる。女と、鏡の男の影とが、共に越えるとしたのであり、片桐洋一校注『後撰和歌集』（新大系、一九九〇・四）の「この鏡とともに、そこに映っている私の像を私と同じものと思っただくべくお贈りいたします」ということではなからう。鏡に二人の並んだ影が映るということではないが、それと近い発想となる。また、先に見た『源氏物語』『須磨』巻の光源氏歌の参照歌にされる歌であった。

⑥ 遠き国にまかりける人に、旅の具つかはしける、鏡の箱の裏に書き付けてつかはしける

身を分くる事のかたさに増鏡影ばかりをぞ君に添へつる

〔後撰集〕離別・一三一四・大久保則善。

〔古今六帖〕五・服飾・鏡・三二二五

遠くに下向する人に旅の用具を送った際、鏡箱の裏に書き付けた歌である。⑤と近い発想である。歌は、「我が身を二つに分けることができないので、鏡に宿る私の影だけでもあなたに添えるようにしました」となる。歌の「増鏡」に対して、片桐『後撰和歌集』は、「枕詞の役割を果たしている」としているが、自分の影を宿した鏡の意が实际的に詠まれていよう。この歌は、諸注が指摘するように、「東の方へまかりける人に、よみてつかはしける／思へども身をし分けねば目に見えぬ心を君にたぐへてぞやる（『古今集』離別・三七三・伊香子淳行）を引歌としている。引歌は「目に見えぬ心」を託したとしているが、⑥の歌は、自身の影を鏡に宿したとしている。自身のこと、鏡によって目に見えるとしたことになる。「遠き国にまかりける人」の男女は不明であり、どちらとも解釈できるが、女としたならば、交渉を持ったことがあったと思われる。

⑦ 語らふ人の、遠き国へまかるに、鏡とらすとて

別るれど影をば添へつ増鏡年月経とも思ひ忘るな

〔惠慶集〕・七三三

さらに⑥と同じような状況の歌であり、書陵部蔵本（六七番歌）で

男と女が見入る鏡の影

は、「相語らふ人の遠き国に下るに、鏡をこころざすとて、箱のぬいたてに」となっている。相手の人は、「語らふ人」とされているので女と思われるが、作者が惠慶法師なので、男であろうか。この歌は、二、三句が、⑥の下句と相似している。作者の年代からして、惠慶法師が引歌としたと思われる。歌は「別れますけれど、私の影を添えました鏡を贈りますので、年月がたっても忘れないでください」となる。この「添へつ」は、⑥の「添へつる」とは違って、鏡に自分の影を添えた意である。男同士の友情というよりは、女との別離の哀情と理解したいような歌である。

⑧ ものへ行く人に鏡とらすとて

見馴れよと添ふる鏡の影だにも曇らで過せ人忘るとも

〔馬内侍集〕・一九七

下向する人に鏡を取らせようとして贈った歌である。作者からすると、「ものへ行く人」は、姉妹か女友達になるうが、「とらす」とあることからすれば、妹か後輩であろう。歌は、「見馴れるようにと、私の影を添えた鏡です、その影だけでも曇らせないで過ごしなさい。人は忘れても、私はあなたを忘れません」となるうか。「曇らで」は「鏡」の縁語になるが、これ以下を竹鼻續『馬内侍集注釈』（貴重本刊行会、一九九八・七）は、「その鏡に映る姿だけでもはればれとした状態で過ごしてほしい」としている。「曇らで」を相手の状態と解しているようである。しかし、「影だにも曇らで」と続くので、鏡に宿った私の影を曇らせないでほしいとなるう。私のことを忘れないうでの意を託したのである。「添ふる」は⑦と同じ用法になる。

以上、鏡返却際の歌と、饒別に鏡を贈る際の歌を見てみた。鏡は、影を宿す物として実体的に詠まれていたことが判然としよう。こうした鏡の詠まれ方は、平安時代になって定着したものと思われる。上代の『万葉集』の発想とは違っている。万葉歌の相聞に關わる鏡詠は、多く枕詞や序詞として機能していた。

里遠み恋ひうらぶれぬまそ鏡床の刃去らず夢に見えこそ

『万葉集』・二五〇六
まそ鏡手に取り持ちて朝なさな見れども君は飽くこともなし

(同・二五〇七)
まそ鏡見とも言はめや玉かぎる岩垣淵の隠りてある妻

(同・二五一四)
まそ鏡見ませ我が背子我が形見持てらむ時に逢はざらめやも

(同・二九九〇)
まそ鏡直目に君を見てばこそ命に向ふ我が恋やまめ

(同・二九九一)
まそ鏡見飽かぬ妹に逢はずして月の経ゆけば生けりともなし

(同・二九九二)
六首ほど引用したが、いずれの「まそ鏡」も実体的ではなく、枕詞

か序詞の一部となっている。これが平安和歌になると実体的になって
いたし、右の二首目「まそ鏡手に取り持ちて」と近い発想の次の歌で
も相違している。

⑨ 見えもせむ見もせん人を朝ごとに起きてはむかふ鏡ともがな
〔和泉式部集〕・八二二

「恋しい人を、毎朝向かう鏡にしてしまいたい、いつも逢いたい」と
とする歌である。鏡にしたいとするのは空想だが、鏡は実体的に詠ま
れている。枕詞などになる万葉歌と平安和歌との位相の相違が理解で
きよう。鏡に影が宿るとする歌は、平安和歌を彩るのである。

六 影の宿らない鏡の歌

これまでは、主に鏡で男女の情愛を表現する歌を検討してきた。最
後に、男女関係の破綻と関わる例を見ておきたい。男女関係が継続し
ていれば鏡に相手の影は宿るが、成立しないか破綻すれば影は宿らな
い。こうした例を見ることになるが、その前に鏡が割られる説話を見
ておきたい。『今昔物語集』巻十の第十九「不信蘇規、破鏡与妻遠行

語」である。新大系から書き下し文で引用する。

今昔、震旦ノ□代ニ蘇規ト云フ人有ケリ。此ノ人、国王ノ使
トシテ遙ニ遠キ洲ヘ行ケルニ、蘇規、妻ニ語テ云ク、「我レ、国
王ノ使トシテ遙ニ遠キ洲ヘ行ク。汝ト不相見ズシテ久クアルベシ。
然レバ我レ、他ノ女ニ不可娶ズ。汝亦、他ノ男ニ不可近付ズ。此
レニ依テ、一ノ鏡ヲ二ニ破テ、半ハ汝ニ預ム、半ハ我レ持テ行ム。
若シ我レ、他ノ女ニ娶バ、我が半ノ鏡必ズ飛ビ来テ、汝ガ鏡ニ可
合シ。亦若シ、汝ヂ、他ノ男ニ娶バ、亦汝ガ持タル半鏡飛ビ来テ、
我が半鏡ニ可合シ」ト契ルニ、妻喜テ半鏡ヲ得テ、箱ノ内ニ納メ
テ置キツ。亦、蘇規モ此ノ半鏡ヲ取テ、身ヲ放ツ事無クシテ、家
ヲ出デ、彼ノ洲ヘ行ヌ。

其ノ後、程ヲ経テ、妻、家ニ有テ他ノ男ニ娶ニケリ。蘇規、其
ノ事ヲ不知ズシテ外洲ニ有ル間、妻ノ半鏡、忽ニ飛ビ来テ蘇規ガ
半鏡ニ合フ事、沙ノ如シ。然レバ蘇規、我が妻忽ニ約ヲ誤テ、他
ノ男ニ娶ニケリト云フ事ヲ知テ、契ヲ違タル事ヲ恨ケリ。

然レバ、実ノ心ヲ至ス時ニハ、心無キ物ソラ如此クゾ有ケルト
ナム語り伝ヘタルトヤ。〔今昔物語集〕巻十の第十九

破鏡をモチーフとして夫婦の離反を語る話で、無心の鏡の呪力を言
うことで語り納めている。半鏡が言わば割符のように保持されること
で、夫婦間の信頼が継続されるが、それが崩れると半鏡は失われると
いうことになる。『本事詩』『神異経』などの中国経由の話であり、日
本では類話として、『注好選』上・75、『唐物語』などにも収載され、
『綺語抄』は「野森の鏡」の注として引用している。中世的説話とな
り、平安時代にはあまり流行しなかったと思われる。平安時代では鏡
の損傷は不吉とされていたからである。半鏡にすることが、男女の離反を
暗示させた可能性もないわけではなからう。そして、わざわざ半鏡に
するまでもなく、平安時代では、鏡に宿る相手の影の消失で、その心
変りが判断できると考えられていた。破鏡よりも鏡影のほうに、馴染

みやすかったのである。以下、男女関係で鏡の影の不在を言う例を、和歌集から取り出していきたい。

- (1) 物言ひける女の鏡を借りて返すとて

影にだに見えもやすると頼みつるかひなく恋をます鏡かな

〔後撰集〕恋四・八〇五

借りた鏡を返す際に添えた歌だが、前節とは違って鏡に姿が宿らな
いとす例である。「物言ひける女」とあるので、男女関係にあった
ことになる。歌は、「あなたの姿が見えはしないかと当てにしていた
甲斐もなく、宿って映ることもないので、ますます恋心が募る鏡であ
りましたよ」と詠んでいる。女の姿が鏡に宿って映っていれば、それ
は愛情のあかしになる。しかし、そうではないと詠むことで、暗に女
の愛情の薄さを言っている。もしかしたら、自身の愛情は募るばかり
だとしながら、鏡返却に託して、男女関係の清算を念じているのであ
ろう。

- (2) 婿の知光絶えて、置きたりける物の具ども運ぶに、鏡の留ま
りてありける、やるとて

影絶えておぼつかなさのます鏡見ずは我が身の憂きも知られじ

返し、知光

君と我かたみに見むとます鏡そこにとまれる影さへや憂き

〔仲文集〕・三五／三六

離婚した後に、婿が妻の家に置いていた物を送り返したが、鏡が残っ
ていたので送ろうとした際の歌である。離婚したので、女側は鏡に
「影絶えて」と詠み贈ったことになる。そんな鏡を見るのは耐え難い
というわけだが、詳細は前稿で扱ったのでそちらを参照されたい。な
お、贈歌のみ『拾遺集』に入集しており、ここでは「国用が女を、知
光まかり去りて後、鏡を返しつかはすとて、書きつけてつかはしける
／影絶えておぼつかなさのます鏡見ずは我が身の憂きも知られじ（恋
四・九一五・藤原国用女）となっている。

- (3) 人の置きたりける鏡の箱を、返しやるとて

男と女が見入る鏡の影

影だにもとまらざりけり増鏡箱の限りはいふかひもなし

〔和泉式部集〕・五八四

この歌も、(1)と共に前稿で扱ったが、若干触れておきたい。心変り
した男が女のもとに置き放していた鏡箱を、送り返す際に添えた歌で
ある。歌は「あなた自身だけでなく、影でさえも鏡に留まり映って
いませんでした。鏡箱一切があっても何のかわいもないことです」とな
ろう。小松登美他『和泉式部集全釈 正集篇』（笠間書院、二〇一
二・六）では、「箱の限り」を箱だけのこととして、鏡はすでに男が
持ち去っていたと解している。しかし、「限り」は一切の意であり、
鏡も鏡箱もということになる。鏡は入っていよう。そうでなければ、
「影だにもとまらざりけり」が浮いた措辞となる。男の影を宿さない
鏡と箱など、手もとに置いて仕方ないとして、関係にきりをつけた
のである。

- (4) 冬の夜、寝覚めして

片敷きの袖は鏡とこほれども影にも似たる物だにぞなき

〔和泉式部集〕・五九

和泉式部の帥宮哀傷の歌であろう。歌は、「一人分だけ敷く衣の袖
は涙が鏡のように凍っているけれども、その鏡の影にも宮様に似たよ
うなものはまったく映っていないことだ」となる。「こほれ」は底本
「しほれ」だが、佐伯梅友他『和泉式部集全釈 続集篇』（笠間書院、
一九七七・一〇）に倣って改訂した。帥宮はもうこの世にはいないの
で、涙が凍って鏡のようになっても、そこにはその面影が映らないと
絶望した歌になる。影が宿っていれば、慰められるのに、そうではな
いので悲しみは深まるのである。男女離反ではなく死別になるが、前
者であってもこうした詠歌は可能であろう。

- (5) 昔見し人、鏡のみしおこすとて

形見にと思ひて見れど増鏡恋しき人の影も映らず
返し

増鏡明け暮れ見えし憂き影を今は限りと共に忘れぬ

又

増鏡影離るめる君なれどなほ忘れず馴れし面影

『弁乳母集』・一〇〇(二)

昔逢っていた男が鏡だけ送ってきての贈答歌である。男が鏡を送ったのは、それが女から贈られた物であったからであろう。そうでなければ送った理由が分からない。贈歌にあるように形見として手もとに置いていたが、関係再燃はあり得ないとして送り返したのだと思われる。歌は、「あなたの形見だと思っただけでも、鏡には恋しい人の影も映らないことだ」としている。影が映らないとしたのは、わざと女の方に原因があるということになる。女が影を留めることをやめたので、映らないとしたのである。

これに対して女のほうは、「鏡に明け暮れ見えていた辛く感じられるあなたの影を、今はもう限りとして、あなたと共に忘れませ」と返している。「影」を男のものとして詠み、あなたと共に忘れませと断絶を宣言したことになる。

これに対して男はさらに歌を返している。「鏡から影がなくなったあなたですけど、やはり忘れられません、親しんだ面影は」として、やや軟化している。鏡に影が映らなくても、あなたの面影は忘れないうとして、愛情の継続をほめかすのである。しかし、これはポーズであろう。こうした措辞で、ひとまずこの一件にけりをつけたのである。

男は鏡に女の影は映らないとし、女は映る男の影を見るのはつらいものだと応酬している。良好な関係であった折には、二人並んだ影が映っていたことになる。関係が破綻すれば、鏡の影はなくなるとする発想があることは確かである。

(6) 保実卿他に移りて後、かのもとの所常に見侍りける鏡を磨がせて侍りけるが、暗きよし申し侍りけるを聞きてよめる
ことわりや曇ればこそは増鏡うつれる影も見えずなるらめ

『金葉集』二奏本五七九・藤原実信母

実信母の夫であった藤原保実が他の女に心変りしたことを、鏡の曇りに託して詠んだ歌である。他の女のもとに移った保実が、実信母の家でいつも見ていた鏡を家人に磨かせたが、明るく映らない由を申しつけたことを聞いて、鏡に添えさせて詠み贈ったということであろう。歌は、「もつともなことですよ。曇ってしまうと鏡に映る影も見えなくなり、心変りした人も鏡に見えなくなったのでしよう」としている。鏡が暗いのは曇っているからであり、そのために影が映らないことを、心変りしたことに寄せて皮肉ったのである。愛情があれば鏡に影は宿るが、そうでないので「影も見えず」とされたことになる。

(7) 男の、鏡の影変りぬなど言ひたりけるに、返事に歌かく
変わるらん疑がはしきぞ増鏡心もかくやあらんと思へば

『堀河集』・一一六

男が、鏡に映るあなたの影が変わってしまったと言ってきたので、その返事として贈った歌である。鏡の影が変わるとは、曇りを生じていることであり、それは心変りしたことの例えになる。男は心変りを女のことにしたのである。そこで、そんな物言いに抗議したのがこの歌となる。歌は「あなたの心が変わったようだとの疑わしさですよ。鏡に映るあなたの影も心も変わっているだろうと思えますので」となる。女は心変りを男のこととして切り返したのである。

(8) 寄鏡恋
いとどしく恋をますみの鏡かなまだ影だにも人の見えねば

『教長集』・七四七

院政期になって恋題として定着した、鏡に寄せる恋の題詠である。ここでは、恋の思いが相手に届かないことを詠んでいる。歌は「実に激しく恋心が増すことです。澄んだ鏡にまだ影でさえもあの人が映って見えないので」となる。恋の思いが届けば、相手の影が鏡に映るが、まだそうやってはいないので見えないとして、募る恋心を詠んだのである。

以上、鏡に影を宿さないことを詠んだ歌を見て来た。死別の場合も

参照したが、鏡に映る影の有無が、男女の情愛のありようと密接にかかわっていた次第を見てきたことになる。

おわりに

平安文学には鏡の用例がかなり認められる。本稿では、男女の情愛にかかわる例のその一部を取り出しただけに過ぎない。しかし、それなりの例を拾えたのではないかと判断される。鏡に影が宿るとする発想や信仰が、いかに平安文学の表現史にかかわっていたかの一端は示し得たかと思われる。さらに用例を厳密に押さえる必要があるが、ひとまず以上の検討で筆を擱くことにしたい。

注

- (1) 康平六年(一〇六三)七月三日の内大臣師実の花山院移徙(『類聚雜要抄』、永久三年(一一一五)七月二十一日の関白忠実の東三条邸移徙(『殿暦』、永久五年(一一一七)七月二日の鴨居殿移徙(『類聚雜要抄』、保延六年(一一四〇)十一月四日の土御門内裏移徙(『類聚雜要抄』)など。
- (2) 服藤早苗「王朝貴族の邸宅と女性——伝領」(『平安王朝社会のジェンダー』校倉書房、二〇〇五・六)
- (3) 服藤早苗『落窪物語』にみる婚姻儀礼——平安中期貴族層の結婚式——(『埼玉学園大学紀要 人間学部篇』6、二〇〇六・一二)、小嶋菜温子「王朝の家と鏡——かぐや姫・落窪の姫君の結婚から——」(服藤早苗編『女と子どもの王朝史』森話社、二〇〇七・四)
- (4) 平安貴族は、初度の懸想文を贈ることを「言ひ初め」としていた。拙稿「平安貴族の求婚事情——懸想文の「言ひ初め」という儀礼作法——」(小嶋菜温子・服藤早苗・倉田実共編『王朝びとの生活誌』森話社、二〇〇三・三)
- (5) 注(3)の服藤論に同じ。
- (6) 注(3)の小嶋論に同じ。

男と女が見入る鏡の影

- (7) 鏡を見る光源氏については、堀淳一「鏡に見ゆる影——光源氏と紫上の人物造型と「百鍊鏡」——」(『文芸研究(東北大)』129、一九九二・一)、立石和弘「鏡のなかの光源氏」(『源氏研究』2、翰林書房、一九九七・四)、松井健児「鏡を見る玉鬘——「源氏物語」と自己観照——」(『叢書想像する平安文学』6、勉誠出版、二〇〇一・五)などがある。

- (8) 注(7)の松井論。

- (9) 拙稿「女が男に物を返す時——平安和歌にみる離婚・離縁——」(『大妻女子大学紀要—文系—』42、二〇一〇年三月)